

## Cromford Village

—世界で最初の工場植民地—

伊藤喜栄

クロムフォード。それは産業革命期の発明家  
アークライトが、自らの手になるウォーターフ  
レーム紡績機を用いて、世界で最初の近代工場を  
建設した場所として知られている。ここでいう近  
代工場とは、分業に基づく協業という労働組織  
と、複数の工程がシステム化されたうえで自動化  
されている機械体系が結びついて、効率よく生産  
活動を行っている事業所のことである。

恐らく経済史においては、極めてよく知られた  
事実であり、改めて話題になることもないと思わ  
れるが、地理学、とりわけ経済地理学において  
は、逆に無知であるが故に殆ど問題とされてはこ  
なかつた。しかしながら、主体が環境を認識し、  
これを改変、活用しながら地域をつくるという立  
場からするならば、アークライトのクロムフォ  
ードでの実験は、近代を地理学として理解するう  
えで、画期的な意味を持っていると思われる。そ  
れは、資本家が、自らの資本の増殖ということ  
を、殆ど唯一の目的として、特定の場所に集中  
的に投資を行い、短時日のうちに資本に奉仕する  
地域をつくり上げてゆくという、いわば資本主義  
社会に特有の地域形成ないしは再編成のしくみを、  
世界で最初に開発したということの意味している。  
近代における地域開発とは、まさにこのような  
ものとして立ち現れる。

私がクロムフォードを知ったのは、1971年、堀  
江英一編『イギリス工場制度の成立』（ミネル  
ヴァ書房、1971年）においてであった。同書によ  
れば、そこはペナイン山脈を刻んで流れるダー  
ヴェント川（トレント川上流）沿いにあり、水車  
と近代工場という組合せから、自ずと深い溪谷と  
急流をイメージさせる記述となっていた。同書に  
接して以来、一度現地を訪れ、この深い谷と急流  
を確かめたいと思い続けていたが、1989年、や  
つとその機会がやって来た。慶応大学からの派遣  
で、1年間シェフィールド大学の地理学部に留学  
する機会を得たからである。そこはシェフィール

ドから南に約30キロ、ピークディスリクトとい  
うヒースの丘の続く国立公園を越えたところにあ  
り、自動車で40分ほどの、実に快適なドライブで  
ある。最初にこの地を訪れたのはシェフィールド  
到着1ヶ月後の1989年5月のことであった。全く  
の初めての訪問であったにもかかわらず、何となく  
故郷に帰って来たような、異様な懐かしさに興  
奮したことを昨日のこのように覚えている。但  
し、深山幽谷という勝手な先入観は見事に裏切ら  
れた。ペナイン山脈の山々は、海拔高度こそ  
700~800メートルと、イギリスとしては高山に属  
するが、山容は大きく穏やかで、まさに大きな  
丘、即ちhillである。従って谷もゆったりと大き  
く、日本で見馴れたV字谷の急流なぞどこにも無  
い。このダーヴェント川ではとても水車がかかり  
そうもないので不思議に思っていたところ、その  
秘密を解く鍵は工場の上の貯水池にあった。ここ  
で水量を調節し、工場まで水路を引いて、落差を  
利用して大きな（直径3mくらい、幅1mくら  
い）水車を廻すのである。

現在アークライトが最初につくった工場  
（1771）はアークライト協会が買収して博物館と  
なっている。そして、ここを中心として、ほぼ直  
径2キロくらいの範囲にアークライトの邸宅  
（1771・1791）、礼拝堂（1777）、教会（1797）、運  
河（1794）、旅館（1778・1779）、労働者住宅  
（1777）、ショッピング施設（1790）、第2・第3  
・第4工場（1777・1778・1783）等が次々に建て  
られて行く。かくしてこのクロムフォードは、18  
世紀の末頃にはアークライトの本拠地として、文  
字通りFactory Colony、ないしはFactory Com  
munityを形成することになる。そしてイギリス綿  
業の発展とともに、この種のColonyが、イング  
ランド北部からスコットランドにかけて急増して  
行く。クロムフォードはまさにこのような地域近代  
化のモニュメントにはかならないのである。

（慶応大学）